阿部先生の追想

回想の阿部良平先生

広瀬弘幸

『骸骨』それは故阿部良平先生のニックネームでした。いささか突き出し過ぎたカン骨と幾分かこげ過ぎた顔、殊に物をいわれる時の下顎の微妙なゆれ動きと共に、上顎から垂れ下つた様に長い歯のならびが、私共中学生には何かしら博物教室にある頭蓋骨標本を連想させたに違いありません。先生には私が北海道大学在籍中に一度御眼にかかつたのが最後になつたまま永遠に逝かれてしまいましたが、先生を偲びますと先づ先生の特徴ある容貌が次第にはつきりと、そして懐しく浮んで参ります。その御顔から述べられ与えられました数々の印象深い御言葉を想い出し、かみしめますと切々の情が禁じ得なくなつて参ります。

阿部先生の伝記其他の記録的な事項は誰方かゞ御書き下さると思いますので、こゝには先生を偲び乍ら思い出すまゝに語らして戴きます。

大正14年私が旧姫路中学（現在の姫路西高等学校）に入学した1年目の植物の授業は鎌田久穂先生の御担当でしたが、同先生の御部屋に或は質問に行つたり、或は特別に顕微鏡などを覗かせて戴いたりしました折に、同じ部屋に、一寸おそろしい様な、こわいような、然し笑われるとそうでもないような先生がおられるのを発見しましたのが、先生を知つた最初です。当時の姫路中学の博物教室は、本館1階にある教官室との連絡上、南窓から中庭に3段ばかりの梯子段を通用口に使用しておられましたが、阿部先生が此の階段からはいつて来られると、突然に緊張を覺えたものでした。間もなく先生が寮の舎官であられる事、舎官対寮生の中学生なら血を湧かす様なスリルの数々、先生の無上の好物が御酒である事 etc. を知りました。御酒といえば坊主町の先生の御邸の蔵には全国から集められた数々の盃で埋もつているという話を承りましたが、遂に見せて戴かぬまゝに伝説になつてしまいましたが、酒をたしなまれる御楽しみが御令息の知二さんにそつくり受け継がれていますので、故先生も安らかに眠つておられることゝ信じます。私は間もなく辯論部に籍を置きましたので、部長さんの阿部先生から次第に御教示を受ける様になりましたので、第一印象の所謂こわさは薄らいで行きました。今から想えば頭から火の出る様な恥しい拙文を眼鏡越しに丁寧に幾度も幾度も読んで下さつて、勇気づけ乍ら直して下さつた事が忘れられません。

先生から正式に授業を受けましたのは、第4学年の地質鉱物学でしたが、先生は寮の舎官をしておられた関係からか、学生の訓育方面に特に意を用い乍ら授業を進めておられた様に思います。と申しますのは、今日でも新鮮な感覚を持つて想い出します先生の訓話的挿話の数々を想い起しますが、今その一つを紹介しましょう。授業の始りに何の前ぶれもなく黑板上は『自瀆』の二文字を書いてしばらく吾々をじろりじろりと見渡しておられます。やおら口をついて出た言葉は『此の言葉を知つとるか』でしたが、寮生活のよさもわるさも知らない自宅通学生だつた私には『自ら瀆す』意味がわからず折角の御話が私に対してはいささか的はずれだつたのでしたが、何となくあの様な意味である事が了察出来ました。先生は、じゆんじゆんと自瀆に対する中学生の心構えを悟しておられた様に記憶します。想えば深慮ある性教育を施されておられたのでしよう。

翌る昭和4年私は姫路高等学校へ入学しましたが、その翌5年の10月に只今の兵庫生物学会の前身である兵庫県博物学会が発足し、阿部先生が会長に就任されました。先生には会誌の発行やら諸々の行事やら創業の仕事は大変な御骨折だつた事と拝察いたします。その行事の一つとして、昭和6年の8月に宍粟郡の奥谷で採集会が催された事がありました。丁度先生の御令息の知二さんが参加されていました。知二さんから朝鮮の古墳発掘に従事された話しや北支を遍遊された話しを興味深く聴かせて戴いた事や、良平先生から『植物をやるんなら必ず学名で覚えなけりやねばいけない』との御忠言が一緒になつて、おおいたどりのむせるような草いきれと、音水のせせらぎ等と共に、不思議に印象深く頭にこびりついています。

私が北大に向い姫路を離れましてからはすつかり御無沙汰してしまいましたが、藍藻の分類に関する私の処女論文が出ました時、先生から『図版と原稿とをそのまゝ送られよ、再印刷に附して博物学会の会員に配布するから』という御話があり、光栄に感激した次第でしたが、そのまゝ何の沙汰もないまゝに今日に至つております。追憶中に余談恐縮ですが、拙著の図版と原稿、現会員の何誰かで図版の所在について御知らせ願えれば幸甚です。

先生についての最後の想出は昭和14年の夏、私が墓参に帰省して、坊主町の御宅に御訪ねしました折『独身者はとかくつまらぬことをして遊びすぎるが、それより親孝行したまえ』と説教されましたのが最後でした。当時流行のカフエー遊びにそろそろ興味をそゝられる

頃でしたので、甚だ痛く、項門の一針として銘記しております。先生から直接御声をきいたのは之が最後でありまして、戦争末期のあわたゞしいさ中に逝かれました。教育家としての阿部先生、師としての先生を私は限りなく敬愛します。こういわざるを得ないし、又こうしてやらねば気が済まぬ師、そう感ぜざるを得ない弟子。このような関係において戴いた事をいつも有難く感謝しております。幾多の悪弊ある封建性の遺風の中で数少い美風、永遠の師、永遠の弟子のよき関係は、戦後のモラールに訴えても必ず共感を呼ぶものがあると私は信じています。その限りに於いて、先生はほんとうに良き師でありました。しみじみと御偲び申上げる次第です。

阿部會長を偲ぶ

大浦茂樹

大浦茂樹昭和8年4月私が招聘せられて奈良女高師から神戸市(勧農山小学校)に来任したとき早速に阿部先生が来訪せられた。これが先生と相識る最初であつた。先生はもう姫路中学をおやめになつて兵庫県博物学会々長として専念されている矢先で、博物学会の生立ちやら業績、今後の進むべき道、抱負などを、いとも熱意のこもつた口調でお話になり「今回先生を本県にお迎えしたことは本会にとつてもこの上もない仕合せであり、強味である。大いにお力添えを……」という頗るいんぎんにして謙遜なお言葉に私は頭が下つた。この時先生は大変強く申されたことの一つに、「博物学会は中等学校の博物の先生だけの会ではなく、小学校の先生も、広く一般の方々にも、はいつてもらう大衆的の研究団体であるから、特に小学校方面の開拓に一層の努力を払いたい」ということであつた。当時一般の人々の中には小四郎畔小林桂助、矢倉甫田等のお歴々もあり、山草会の方々、時には婦人会の方々など、多数参加研究にいそしんでいられたことは、本会の特色であつた。

先生はお若い時から自然に親しみ、山野を跋渉せられただけに、お躰が実によく引きしまつていた。やせ型で色黒のお顔付であつたが、心のゆとりと落付きが、よくお顔に現れていて、温厚篤実そのものという感じを強く与えられた。

爾来先生は私の学校(神戸市勧農山小学校)に度々立寄られた。又本会の総会や例会、臨時の講演会、研究会などによく私の学校を会場とせられた。昭和15年10月13日の本会最後の総会(第13回)並に本会10周年記念式も私の学校で挙げられたのであつた。

こうした関係で私は阿部先生とは公私共に実に親密になつた。そして先生と相識ること深くなる程先生の徳を敬仰する念が深まつていつた。最後の総会で、満場一致で阿部会長に対し感謝状並に記念品をお贈りすることを可決されたのであつたが、その記念品は奈良の名工一刀彫の名手市川鉄琅師に依頼することもきまり、私がその交渉斡旋を一任された。鉄琅師は私の奈良女高師時代に親しくした方で、加納鉄哉師の高弟、元は鉄哉師について、東京と奈良の帝室博物館の御蔵品の保存修理官に任ぜられていたが、師の死後奈良に居を定めて高級の彫刻に精進していた。私は数度奈良の鉄琅師を訪い、阿部先生の人格と御趣味をよくお話申上げた処、最もしぶみのある高尚にして由緒深き正倉院御物の呉女面と、東大寺秘蔵の蘭陵王面と、天与寺の伎楽面の三体を模して作られ、之に師独得の古色豊かな着色をせられ、之をたしか奈良の神代杉の一枚板に取りつけて完成されたのであつた。その贈呈式が昭和15年11月3日に姫路市坊主町の先生のお宅で行われたが、先生は心からこの作品を喜ばれ、斜から見たり、正面から眺めたり、立てたりねかしたりして見ては、之は気に入つたと悦に入つて居られた。

先生は又博識にしてよく勘の働く方であつた。昭和12、3年頃のこと会員樋口繁一氏からの通信で、丹波に安口とかいて、はだかすと読む部落があるということを知つた阿部先生の頭には電光の如く閃くものがあつた。それはサンショウウオ即ちハンザキに関係があるという判断であつた。早速樋口氏にこのことを書き送つて調査を装められたことから力づいて、同氏はたんねんにそこを調べ、ハンザキが昔からその部落に棲んでいたことなどをつきとめたという興味ある報告が同会誌第15号にのつてある。これは先生の博識と勘の力の強さにいたく感動させられた一例である。

阿部良平先生をしのびて

建部恵潤

私は昭和8年5月旧竜野中学校で総会が開かれた日に兵庫県博物学会に入会した。午後天然記念物菊崎の屏風岩の見学の帰途恩師藤井初治先生から会長阿部良平先生に紹介された。印象的な先生の風貌が今なお眼前に浮ぶ。

中学5年生の子供であつたのだから思えばずいぶん

古い思い出である。

昭和9年夏私の郷里宍粟郡富栖村の天然記念物鹿ケ壺甌穴の見学と植物採集会を懇請するために陸井先生をお訪ねしたところ、阿部先生のお宅へお出でになつているとのことで、すぐに姫路の先生のお宅へ陸井先生を追かけた。両先生の前で願いがかなえられ喜んで帰つたのが先生をお訪ねした最初であつた。その翌年京都の竜谷大学へ入学してからは休暇の往復の途中度々お訪ねしたことも思い出され、その都度宍粟植物の調査を御激励いたゞいたことが今なお有難い思い出となる。[redacted]

昭和14年6月18日神崎郡小学校理科研究会で田代善太郎先生をお招きして香呂村で採集会を開くから前日から来いとの御通知をいたゞいた。お言葉にあまえて室井綽君とお宅に泊めていたゞいたが、翌日田代先生御紹介の続きに今日の助手につれて来たと室井君と共に紹介されてしりこそばい限りであつた。[redacted]

この夏かねて念願していた宍粟郡船越山の採集会をお願いしたところ早速実現していたゞき8月1、2日田代先生をお招きして盛大な採集会が開かれた。その記録は博物学会々誌第1号にのせてあり、富栖村といゝ、船越山といゝ先生からいたゞいた格別の御厚志は忘れることができない。[redacted]

15年5月私は姫路に奉職したが、下宿難に困つているのを奥様の御尽力でお宅の近くに住めるようになつた。坊主が坊主町に住むのは何かの因縁だとお二人で大笑されたこともあつた。[redacted]

学校へ電話があつた。帰途参上すると、京都大学川村多実二教授が野鳥の多い山へ行つてみたいとのことだが何処がよいかと御相談であつた。おすゝめしたのが船越山で昭和15年6月15、16日の探鳥会となり、川村教授「鳥の歌の科学」に集録されたホホジロの方言もこの時のものであり、昨今小鳥を唯一の観光資源の如く宣伝されている船越山であるが、実はこの探鳥会以来世間に知られるようになつたものである。[redacted]

又その秋マツタケの出る頃、飾磨郡古知小学校から植物採集の指導を依頼されたが第一線をしりぞいた老朽品は役に立たぬから代理を務めよとのことで危い代理をさせていたゞいた。[redacted]

17年3月まで1年8ヶ月の間度重なる気軽さに浴衣がけでお伺いし、その度毎に先生の次から次へ流れ出るようなお話を拝聴した。先生は本当に話題の豊富な方であつた。お夕食に一杯たしなまれた後など気えんも相当なものだつた。時には奥様から良妻賢母の選択眼を大いに伝授されたこともあつた。しかし今思うことであるが、あの立派な御令息を持たれながら終に一度も阿部知二氏の御自慢を聞いたことがなかつた。[redacted]

お宅の西は二階になつていて先生はよくこの座敷へ御案内下さつた。この間には満10週年を迎えた博物学会から贈つた一刀彫の記念がかゝげられたが、別に日本紋章学者沼田頼甫博士の書がかゝげてあつた。その由来は阿部先生が小学校に勤めていられた頃岡山師範学校に居られた博士が講習会の講師になられたことが縁となり、当時古墳の研究に努めていられた博士の案内をされたり、又博士の指導を受けられることも多く、後博士が島根県米子中学校長となられるや招かれて同校に勤務されたのが中等学校勤務の始りで、博士と先生は極めて親しい間であつたと聞かされて驚いた。博士の御子息京都大学沼田教授をお知りですかとお尋ねすると、よく知つているが君こそなぜ知つているかとの御反問に教授夫人実家との関係や教授の宅を訪ねたことを申し上げると非常に喜ばれ、その後はお伺いするごとに沼田博士の思い出話をうかゞつた。御令室はなかなか賢夫人で正規の大学教育を受けられなかつた博士をあれだけの学者にされたのは実に夫人のお手柄だ。君もこの本をよく読んでお奥さんをもらつたらよく話して聞かせろとお貸し下さつたのが博士、御子息方の追悼文集「散りもみぢ」であつた。縁故ある君にゆずつてやろうと博士が自作漢詩一首を記して先生に贈られた綱要日本紋章学をいたゞいのが先生をしのぶ最もよき記念物となつた。[redacted]

次にいろんなお話の中で今なお忘れることの出来ない先生自序伝の一節を記して先生の御風格をしのびたい。

おれは岡山県湯郷の出身で、小学校を卒業してすぐ小学校の助教をやつた。色町の近くに居たが生徒の方がおれよりすつとませていた。町の銭湯に入つていると生徒どもが入つて来るが、おれの居るのを知らぬふりして聞えよがしに「阿部先生とかけて何と解く？」「孟宗藪と解く。」「意はマダケが生えぬ。」とやつていた。年は15で思えば長い教員生活であつたよ。と、[redacted]

味気ない下宿生活の私には阿部先生のお宅こそ実に砂漠のオアシスであつた。[redacted]

公的に先生は兵庫県博物学会の誕生以来昭和16年の解散に至るまで会長として会の発展に尽された育ての親であつた。先生は此の間発行された20巻の会誌に御自身の研究はほんど発表されなかつた。しかし「郷土ノ自然及ビ自然現象ヲ研究調査シ、広ク博物趣味ノ普及並ニ博物教授ノ向上徹底ヲ図ル」ことを目的とした本会を健全に育て、採集会、見学会、講演会、会誌の発行、参考書及ノートの発行等の事業が適切に実施せられて本会がその目的を達成し得たことは勿論幹部諸彦の御尽力と300名会員の親和協力によるとはいえ先

生の御人格のしからしめるところ大なるものがあつた。殊に郷土の自然研究調査は本会によつて大いに進められ其の基礎が固められたことは特筆してよいことである。郷土の自然物を研究しようとするものには会誌20巻は後まで最もよき手引となるもので、斯る県下の研究家にとつて、先生はいつまでも忘れ得ぬ恩人である。私は今博物学会々長としての阿部先生、そして格別の御懇情をいたゞいた阿部先生をしのびつゝ、先生から托された郷土植物の調査を細々ながらも続け長年の御恩顧に答えたい決意を新にしている。

（昭和27年1月4日記）

阿部先生の思い出

―― アリストートルのチョウチンと鹿ケ壺見学 ――

土　橋　忠　重

僕が阿部会長を知つたのは昭和7年兵庫県博物学会に入会してからのことである。その頃僕の学校に三木という英語の先生がいて、姫路中学で阿部先生から博物を習つたとのことであつた。又入学当初保証人がなくて困つていたところ阿部先生が引受けてくれたといつて坊主町のお宅の話その他阿部先生についての知識を与えてくれた。この三木先生の阿部先生への第一の印象はアリストートルノチョウチンであつたらしい。先生はあの無味無乾燥な動物の形態を生徒に面白く興味深く印象的に指導されことをきいて感心したものだつた。後年姫路中学―姫路西高校―を訪れて博物標本室並教室を参観した時阿部先生の御苦心の程がうかがわれて懐しく思つた。僕の阿部会長の思い出は数々あるが、特に印象に残るのは鹿ケ壺見学―昭和10年9月――の時である。それは当時日本と独乙とは親交があり、姫路高等学校(旧制)にはボイエルラインという独乙人が来ていて、この見学に参加したから特に感じたのかも知れない。

兎も角姫路駅前であつたと思う。会長は参加者を集めてこの珍客を紹介された。――ボイエルライン様と案内の楠正貫教授の御両人は共に背が高く長いオーバーを着て写真機をさげていた。会長は霜降りの詰襟服で肩から胴乱を下げていた。静かに右手で帽子（海老茶色の中折帽）を脱いで前に垂れ、左手を帽子の縁に添えて――大きな尖つた光つた頭、鼻の先にかけた眼鏡、その眼鏡越しにギョロギョロッと光つた眼、おもむろに紹介する言葉の内には友邦独乙の科学者が、この研究会に参加したことが会長としてどのように嬉しかつたか、厳かめしい顔面にも、たとえようのない明るさがただよつていた。

阿部先生はどんなに小さいものをも見捨てずに拾い上げて慈み育てるという人であつた。およそ僕のような田舎者は会長様と云へばどんなにか偉く、到底われわれの近寄り難い方であろうと引込思案が先に立つて話をする機会も、話される機会もないのが普通である。ところが先生は会長と会員、古参と新参の区別なくよく御世話下され、親切に教えて下さつた。又つまらぬささやかな研究でも取上げて、つとめて会報に発表する機会を作つて下さつた。そのようであつたから博物学会の催しのあつた時など遠い所からでも、忙しい時でも都合をつけて集つていつたものである。僕等が真夜中に起きて但馬から参加したのも先生の人格に接したい欲望に他なかつた。

〃遠路御苦労様、今日は何時に出かけましたか〃

〃夜行の2時で〃

〃ホオー御苦労様、御苦労様〃

これは阿部会長と僕の朝の挨拶のきまり文句であつた。僕は会長のこの言葉に接して〃今日も来てよかつた〃と心から満足するのであつた。

阿部先生の思い出を書くために兵庫県博物学会誌を開いてみた。久し振りに接する堂々たる内容、よくもこれ程の大仕事が出来たものだと今更ながら阿部会長の居られた兵庫県博物学会が懐しい。

有　用　植　物　學

京大教授理学博士　北　村　四　郎著

植物分類学専門家によつて書かれた書であつて、今までにちょつと類書のない好著である。初めに主なる有用植物を含む属までに至る新しい系統的分類大系を略述し、多くの解剖図を附して理解に便なる様にしてあり初歩の分類学研究者にとつても手頃ないゝ参考書である。各論に於いては、栽培植物の歴史及びその分類学的見解に於いて独自な著者の多年の御研究の結果がすい所に現れている。新制大学の教科書、参考書として書かれたものであるが、一般植物同好者、新制高校、中学校、小学校の教官の教材又は参考書としてぜひ座右に一冊ほしい名著である。　東京朝倉書房発行　260頁　定価380円